

[拠点形成概要及び採択理由]

機 関 名	立命館大学		
拠点のプログラム名称	「生存学」創成拠点		
中核となる専攻等名	先端総合学術研究科先端総合学術専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 立岩 真也 教授	外	15 名

[拠点形成の目的]

人々は身体の様々な異なりのもとで、また自分自身における変化のもとに生きている。それは人々の連帯や贈与の契機であるとともに、人々の敵対の理由ともされる。また、個人の困難であるとともに、現在・将来の社会の危機としても語られる。こうしてそれは、人と社会を形成し変化させている、大きな本質的な部分である。本研究拠点は、**様々な身体の状態を有する人、状態の変化を経験して生きていく人たちの生の様式・技法を知り、それと社会との関わりを解析し、人々のこれからの生き方を構想し、あるべき社会・世界を実現する手立てを示す。**

世界中の人が他者との異なりと自らの変容とともに生きているのに、**世界のどこにでもあるこの現実を従来の学は十分に掬ってこなかった。**もちろん、病人や障害者を対象とする医療や福祉の学はある。ただそれらは治療し援助する学問で、そこから見えるものだけを見る。あるいは、押し付けはもう止めるから自分で決めろと生命倫理学は言う。また、ある型の哲学や宗教は現世への未練を捨てることを薦める。しかしもっと多くのことが実際に起こっている。また理論的にも追究されるべきである。同じ人が身体を厭わしいと思うが大切にも思う。技術に期待しつつ技術を疎ましいとも思う。援助が与えられる前に生きられる過程があり、自ら得てきたものがある。また、援助する人・学・実践・制度と援助される人の生との間に生じた連帯や摩擦や対立がある。それらを**学的に、本格的に把握する学が求められている。**その上で未来の支援のあり方も構想されるべきである。

関連する研究は過去も現在も世界中にある。しかしそれらは散在し、研究の拠点はどこにもない。私たちが、これまで人文社会科学系の研究機関において不十分だった組織的な教育・研究の体制を確立し、研究成果を量産し多言語で発信することにより、これから5年の後、その位置に就く。

[拠点形成計画の概要]

なにより日常の継続的な研究活動に重点を置き、研究成果、とりわけ学生・研究員・PDによる**研究成果を生産することを目指す。**効率的に成果を生み出し集積し、成果を速やかに他言語にする。そのための研究基盤を確立し、強力な指導・支援体制を敷き、以下の研究を遂行する。

■ I **身体を巡り障老病異を巡り、とくに近代・現代に起こったこと、言われ考えられてきたことを集積し、全容を明らかにし、公開し、考察する。**◆蓄積した資料を増補・整理、ウェブ等で公開する。重要なものは英語化。◆各国の政策、国際組織を調査、政策・活動・主張の現況を把握できる情報拠点を確立・運営する。資料も重要なものは英語化。こうして集めるべきものを集めきる。それは学生の基礎研究力をつける教育課程でもある。◆その土台の上に、諸学の成果を整理しつつ、主要な理論的争点について考究する。例：身体はどこまでを変えてよいのか。なおすこと、補うこと、そのままにすることの関係はどうなっているのか。この苦しみの状態から逃れたいことと、その私を肯定したいこととの関係はどうか。本人の意思として示されるものにどう対するのか、等。

■ II **差異と変容を経験している人・その人と共にいる人が研究に参加し、科学を利用し、学問を作る、その場と回路を作る。**当事者参加は誰も反対しない標語になったが、実現されていない。また専門家たちも何を求められているかを知ろうとしている。両者を含み繋ぐ機構を作る。◆障害等を有する人の教育研究環境、とくに情報へのアクセシビリティの改善。まず本拠点の教育・研究環境を再検討・再構築し、汎用可能なものとして他に提示する。また、著作権等、社会全体の情報の所有・公開・流通のあり方を検討し、対案を示す。その必要を現に有する学生を中心に研究する。◆自然科学研究・技術開発への貢献。利用者は何が欲しいのか、欲しくないかを伝え、聞き、やりとりし、作られたものを使い、その評価をフィードバックする経路・機構を作る。◆人を相手に調査・実験・研究する社会科学・自然科学のあり方を、研究の対象となる人たちを交えて検討する。さらにより広く研究・開発の優先順位、コストと利益の配分について研究し、将来像を提起する。

■ III **このままの世界では生き難い人たちがどうやって生きていくかを考え、示す。**政治哲学や経済学の知見をも参照しつつ、またこれらの領域での研究を行い成果を発表しつつ、より具体的な案を提出する。◆民間の活動の強化につながる研究。現に活動に従事する学生を含め、様々な人・組織と協議し、企画を立案し実施する。組織の運営・経営に資するための研究も並行して行い、成果を社会に還元する。◆実地調査を含む歴史と現状の分析を経、基本的・理論的な考察のもとに、資源の分配、社会サービスの仕組み、供給体制・機構を立案し提示する。◆直接的な援助に関わる組織とともに政策の転換・推進を目指す組織に着目。国際医療保険の構想等、国境を越えた機構の可能性を研究、財源論を含め国際的な社会サービス供給システムの提案を行う。

機 関 名	立命館大学
拠点のプログラム名称	「生存学」創成拠点
<p>【採択理由】</p> <p>「生存学」という、ユニークで現代が直面する研究課題を掲げて、その教育研究拠点を形成しようとする、大変意欲的なプログラムであり、大学全体の将来構想の一つの核をなすものである。</p> <p>人材育成面では、障害を持つ人やそれを支援する人たちなどが、自身が抱える課題を探求できる体制を整え、これを研究成果として形を与えようとするもので、実践的でもあり、高く評価できる。</p> <p>研究活動は旺盛で、新分野である分、多様な研究成果が期待でき、国際的な研究ネットワークも速やかに構築されていくものと考えられる。</p> <p>ただし、実験的なプログラムに見合う十分なエネルギーは認められるが、国際的な研究拠点の構築という面では、もう一段の具体策を示すことが望まれる。</p>	